



Data

監督・製作・脚本: バリー・ジェンキンス

原作: ジェイムズ・ボールドウィン『ビール・ストリートの恋人たち』(早川書房刊)

出演: キキ・レイン/ステファン・ジェームス/レジーナ・キング/コールマン・ドミンゴ/テヨナ・パリス/ブライアン・タイラー・ヘンリー/デイエゴ・ルナ/デイヴ・フランコ/ペドロ・パスカル

👁️👁️ みどころ

昨年はホワイト！今年はブラック！一時のそんな喧噪(?)はなくなったが、『ラ・ラ・ランド』(16年)を破って、アカデミー賞作品賞を受賞した『ムーンライト』のバリー・ジェンキンス監督の“黒人モノ”はなお健在！黒人作家ジェイムズ・ボールドウィンの、1970年代のNYハーレムを舞台とした『ロミオとジュリエット』ばりの純愛小説がスクリーン上に！

赤ちゃんができたの！そう言われたら、あなたがお相手の男なら？あなたがその娘の父親なら？母親なら？

若い2人と両家族を巡るそんな物語も興味深いが、黒人差別から生まれる強姦事件のデッチ上げは如何なもの？正義はそんなウソには負けない！誰でもそう思うのだが、さて現実は・・・？

法廷モノとしてはイマイチだが、黒人モノ、純愛モノとしては、こりゃ必見！

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□ 『ムーンライト』に続く、“黒人映画”のヒットは？■□

第89回アカデミー賞の授賞式では、作品賞の発表で『ラ・ラ・ランド』(16年)、『シネマ39』10頁)と『ムーンライト』(16年)の“読み違いミス”という前代未聞の事態が起きたが、あの時「昨年はホワイト！今年はブラック！」現象が起きたのは一体なぜ？それは、『ムーンライト』の評論を読んでもらいたい(『シネマ40』10頁)が、同作を監督したバリー・ジェンキンス監督の最新作が『ビール・ストリートの恋人たち』。本作もアカデミー賞の3部門にノミネートされているが、作品賞ではなく、脚色賞、助演女優賞、作曲賞だから、『ムーンライト』よりは少し評価が下・・・？

私は元々“同性愛もの”や、近時やけに多くなっている“LGBTもの”はあまり好きではないから、『ムーンライト』も作品賞受賞作にもかかわらず星4つにしたが、この手の黒人映画にあまり馴染みがないのもう1つの理由だった。しかし、『ムーンライト』のバリー・ジェンキンス監督がずっと映画化を夢見ていたのが本作らしい。

原作は、黒人の小説家、劇作家、詩人で公民権運動家のジェイムズ・ボールドウィンの同名小説だが、日本人にはまったく馴染みがない。アメリカ文学では、近時なぜか『ライ麦畑でつかまえて』の作家J・D・サリンジャーの人气が再燃しているが、1970年代のハーレムに住む若い男女“ファニー”アロンゾ・ハント（ステファン・ジェームス）とティッシュ・リヴァーズ（キキ・レイン）の純愛を描いたジェイムズ・ボールドウィンの原作は、黒人同士の純愛モノだ。

『ロミオとジュリエット』は若い男女の立場・所属が互いに敵同士だったという障害があったし、藤原審爾の原作で、吉永小百合、浜田光夫が共演した『泥だらけの純情』（63年）は富豪の令嬢とチンピラヤクザの身分違いという障害があった。しかし、本作では恋人同士の若い男女が2人とも「ビール・ストリート」というハーレムに住む黒人という障害があった。しかし、若い男女の恋は障害があればあるほど燃え上がり、美しく咲くというもの。さあ、そんなファニーとティッシュの純愛を描いた黒人監督による黒人映画のヒットは？

■□■ビール・ストリートとは？NYハーレムとは？■□■

私はアメリカ旅行に行ったことがないので、ニューヨークのハーレムという言葉は知っているがそのイメージを思い浮かべることができない。ましてや、バリー・ジェンキンス監督が本作で描いた、1970年代のNYハーレムのイーストヴィレッジとウエストヴィレッジと言われてもわからないし、ビール・ストリートと言われてもそれをイメージすることは全くできない。

ちなみに、大阪市浪速区のJR新今宮駅南側には、日雇い労働者の街として知られる「あいりん地区」があったが、駅北側にボツンと空いた広大な敷地に、近時星野リゾートによるおしゃれな都市型の大規模ホテル建設の話が現実化したため、あいりん地区全体のイメージが一新しそうだ。また、あいりん地区の東側に位置する大阪市西成区には、中国人向けの1曲100円のカラオケ居酒屋の店が増えてきた結果、“大阪中華街構想”が急浮上しているから、まちづくり問題は面白い。

キャスリン・ビグロー監督の『デトロイト』（17年）では1967年に起きた差別主義者の警官による黒人の射殺を契機として起きた“デトロイト暴動”が詳しく描かれていた（『シネマ41』174頁）が、デトロイトは南部のミシガン州にある都市で、もともと黒人差別がひどかったところだ。しかし、1970年代のニューヨークのハーレムでの黒人差別の実態は？本作では、冒頭ナレーションでその実態が語られるが、日本人の私には、

イマイチその実感が・・・。

■黒人ながら服装は令嬢風？若い男女の生活レベルは？■

1967年4月から大阪に下宿して大学生活をスタートさせた私は、当然1970年代の大阪万博を含む当時の日本の豊かさに向けた経済発展のサマを実感している。しかし、黒人作家ジェイムズ・ボールドウィンが描いた1970年代のNYハーレムに住む若い男女の黒人差別はもちろん、その生活レベルは、私には全く分からない。それについては、パンフレットのプロダクションノートにある「70年代のNYハーレムをイメージしたキャラクターの衣装やヘアメイク」と「ボールドウィンの文章とハーレムの街への敬意を込めた撮影とセット・デザイン」を読めば、よくわかる。

しかし、私がアレレ？と思ったことの1つは、ティッシュの令嬢風(?)の服装だ。ファニーとデートする日にティッシュがドレスアップするのは当然だが、それにしてもスクリーン上にみるティッシュの服装はちょっと派手すぎるのでは・・・？男の私にはそう思えたが、どうもそれは、ティッシュがデパートで働く唯一の黒人女性であるうえ、彼女が立つ売場が香水売場であるためらしい。つまり、そこでは店員のファッションセンスも重要視されているわけだ。私がアレレ？と思ったもう1つは、私にはさっぱりわからなかったが、当時のハーレムには階級の差があったこと。つまり、22歳で独立して一人アパートに住んでいるアーティスト志望(?)の青年ファニーのハント家と、父ジョセフ・リヴァーズ(コールマン・ドミンゴ)、母シャロン・リヴァーズ(レジーナ・キング)、姉アーネスティン・リヴァーズ(テヨナ・パリス)と同居している19歳のティッシュのリヴァーズ家との間にはかなりの格差があるらしい。つまり、ハント家は美容院にも頻繁に通うような“ハイクラス”に属しているが、リヴァーズ家は身の丈にあった生活を心がけている」わけだ。

本作では、デートの帰り道にファニーが「俺のアパートに寄っていくか？」と尋ね、ティッシュが同意するシーンが美しいし、その後のベッドシーンも美しい。しかし、それが実現したのは、ファニーが一人でアパートに住んでいたおかげだ。私も学生時代にファニーと同じような行動をしたことは何度もあるが、大きく違うのは住んでいるアパートの部屋の大きさ。私はせいぜい6畳一間だったのに、ファニーのアパートの豪華さにビックリ！こりゃ一度ジェイムズ・ボールドウィンの原作をきっちり読んだ上、NYのハーレムまで視察に行かなくちゃ。

■なぜ強姦罪で逮捕？白人の警官の思うがまま！？■

『デトロイト』(17年)では「差別主義者の権化」のようなデトロイト市警の警官クラスが登場していた(『シネマ41』174頁)が、本作にも同じような警官が登場する。それは、白人警官のベル(エド・スクライン)だ。住む家を探していた結婚を夢みる2人は、

ダウンタウンでは黒人夫婦に家を貸す家主がいない中、ある日やっと家主のレヴィー（デイヴ・フランコ）から理想的な家を借りることができたから、大喜び。

しかし、その帰りに寄った食料品店でティッシュが白人男性から性的な嫌がらせを受けたため、ファニーがその男を突き飛ばしたところ、それを目撃していた警官ベルがファニーを取り押さえようとしたから、ティッシュが必死でそれを止めようとしたのは当然だ。さらに、そこに食料品店の女店主が入り、「悪いのはあの男だ」「私はこの目でしっかり見た」と証言したから、ベルはその場を収めたものの、ひどくプライドを傷つけられたらしい。その腹いせかどうかわからないが、ある日起きた女性ヴィクトリア（エミリー・リオス）の強姦事件で、ファニーが面通しの対象とされた挙句、ヴィクトリアから「あの男だ！」と名指しされたことによってファニーが逮捕されてしまったから、ファニーはもちろんティッシュもビックリ。

これはきっと犯人の顔などともに特定できないヴィクトリアに対して、ベルが強引に誘導したためだ。ファニーが依頼した若い白人弁護士ワイワード（フィン・ウィントロック）はそう説明したが、ファニーのアリバイを証明できる友人のダニーは逮捕されていて証言できないうえ、ヴィクトリアは遠くプエルトリコに移住してしまったから、ヴィクトリアに証言を訂正させるのは難しいらしい。すると、ファニーはむざむざヴィクトリアの誤った供述によって、強姦と言う無実の罪をかぶることになるの？ そんなバカな！ しかし、1970年代のNYのハーレムではそんな話は日常茶飯事だったらしい。つまり、事件のデッチ上げなど、白人警官の思うがまま！？

■□■「赤ちゃんができたの」と言われたら？■□■

仮に22歳のあなたが19歳の女の子と付き合っていて、はじめての肉体関係を持った後、数カ月して女の子から「赤ちゃんができたの」と言われたら、あなたは どうする？ 「それは良かった」とすぐに喜べるなら、あなたはかなり誠実な男だが、私を含めて大方の男は多分そうではないだろう。また、19歳の未婚の娘から「赤ちゃんができたの」と言われたら、父親のあなたならどうする？ いくら進歩的な父親でも、それにはまず驚き次に当惑するはず。少なくとも、すぐに「それは良かった」とは喜べないだろう。しかし、母親の場合は・・・？

本作ではどうも2人で一緒に住む部屋がみつかり、その後ファニーの部屋ではじめて肉体関係を持った日に、ティッシュは妊娠したらしい。そのため、まず第1にティッシュが夫＝父親になるファニーに対してそれを報告するシーンが登場する。しかし、それは予定していた新居の中ではなく、残念ながら拘置所でのガラス越しのご対面！。その理由は、前述のためだ。そこではファニーはティッシュに対して「おめでと。僕も嬉しい。」と答えたからティッシュも大喜びだ。

このようにティッシュがまず最初に妊娠を報告したのはファニーに対してだったが、そ

の次はティッシュの母親。本作でアカデミー賞助演女優賞を演じたレジーナ・キング演じるティッシュの母親シャロン・リヴァーズはティッシュからの報告に対してすぐに「おめでとう」と祝福したから、これもえらい。また、リヴァーズ家では父親も姉もティッシュの妊娠を祝福することに。

すると、3番目はファニーの家族に対する報告だが、それをするためファニーの父親と母親、そして2人の姉をリヴァーズ家に招いたところ、そこではあっと驚く反応になるのでそれに注目！つまり、息子の嫁になるティッシュの妊娠を単純に喜んだのは父親だけで、敬虔なキリスト教信者で、父親とはケンカ状態の母親と二人の姉はティッシュの妊娠を真っ向から批判。“ふしだら”の言葉はもちろん、その批判はボロクソだったから、リヴァーズ家での集まりは大騒動になり、ケンカ別れになることに。現在ティッシュは妊娠3ヶ月だが、ファニーが長期交流を余儀なくされている中、ティッシュの出産や婚姻届はこれからどうなっていくの？

■「法廷モノ」としてはイマイチ・・・■

私は弁護士兼映画評論家として近々、『“法廷モノ”名作映画から学ぶ生きた法律と裁判』を出版する。そんな目で見ると、本作は“黒人モノ”としては傑作だが、“法廷モノ”としてはイマイチ……。その理由の1つは、被疑者とされたファニー本人はよくわからないが、ファニーの家族も、リヴァーズ家で唯一ファニーとティッシュの結婚と妊娠を喜んでくれているティッシュの父親も、若い白人の弁護士ワイワードを信頼していないこと。「いつクビを切ってもいいんだ」という会話をしながら弁護方針を打ち合わせているようでは、無罪の獲得など、ととてもとても……。また、客観的にみても、ワイワード弁護士が言うように、犯人をファニーだと特定した被害者本人のヴィクトリアがプエルトリコに行っている以上、彼女に法廷に立ってもらい、証言を訂正してもらうことが不可欠だが、それができるの？そのための費用はどう準備するの？そこで、ファニーとティッシュの父親同士がやりはじめた行為はおすすめできるものではないが、何はともあれ、それで出張費用が工面できると、ヴィクトリアとの交渉のためプエルトリコに向かったのは、ワイワード弁護士ではなくティッシュの母親のシャロン。ここでも依頼者と弁護士との打ち合わせ不足が顕著だが、さあプエルトリコでみせるシャロンの交渉能力は？

本作のこのシークエンスの演技でレジーナ・キングはゴールデングローブ賞とアカデミー助演女優賞を受賞したことになるから、その演技が見モノだが、残念ながらヴィクトリアとの交渉は不成功。シャロンは自らの失敗を悔しがったが、既に後の祭りだ。すると、その後の裁判の行方は・・・？これでは、本作が法廷モノとしてイマイチなのは仕方なし・・・。

■それから数年後。2人（3人？）が出会う場所は？■

金融商品取引法違反の罪で逮捕されたニッサンのカルロス・ゴーン会長の長期拘留の是

非を巡って、日本の刑事司法のあり方が先進諸国から大きな批判を浴びている。しかし、誤解してはならないのは、それは判決確定までの裁判手続中における被疑者拘留のあり方の問題だということ。つまり、判決が確定し、懲役刑の執行に入った後、家族との面会等において自由度は全く違うということだ。また、日本と西洋諸国でそれが大きく違うのはよく知られているが、日本と韓国でそれが大きく違っているのを私が知ったのは、キム・ギドク監督の『プレス（息）』（07年）を観たとき。同作では、監獄の面会室で死刑囚と美しき面会人との間で濃密な性愛を含む愛の世界が繰り広げられていたから、ビックリ！（『シネマ19』61頁）

それはともかく、映画は「それから〇年」という字幕だけで一気に時代を進めることができるから、便利な芸術。しかして、本作ラストのスクリーン上は、「それから〇年後」になる。その時点では、既にファニーとティッシュの子供が生まれているはずだから、この家族3人はどこで出会っているの？もちろん、ファニーの強姦事件についてアリバイを証言する第三者の証人もおらず、被害者のヴィクトリアの「犯人はファニーだ」という供述が維持されれば、いくらワイワード弁護士が頑張っても、ファニーの無罪はムリ。そして、強姦既遂事件ともなれば、いくら初犯でも実刑は免れないし、少なくとも5～6年はくらうことになるだろう。

1970年代のNYハーレムではホントにこんな“でっち上げ”とも言うべき事件があったの？それとも、これは黒人作家ジェイムズ・ボールドウィンの想像の産物なの？本作ラストは、そんな切ない思いでしっかり家族3人の語らいを見守りたい。

2019（平成31）年2月28日記